

「さき」の時間用法の意味的特質

—LATER IS IN-FRONTのケースを中心に—

澤田 淳

1. はじめに

IN-FRONT (前)、BEHIND (後ろ) を表す空間詞は、時空間メタファー (時空間マッピング) を介して、EARLIER (より早い)、LATER (より遅い) を表す時間詞へと転用されている点が多く、多くの言語で報告されている。そこでは、通言語的に、(i) EARLIER IS IN-FRONT, LATER IS BEHIND (より早い時点は前、より遅い時点は後ろ)、(ii) EARLIER IS BEHIND, LATER IS IN-FRONT (より早い時点は後ろ、より遅い時点は前) という 2 つの時空間的な対応関係のパターンが認められる (Fillmore (1997)、Moore (2014)、澤田 淳 (2025) など)。EARLIER IS IN-FRONT, LATER IS BEHIND は、一方向に順列している (一方向に進む) 複数の個体の空間的な順列関係と、複数の出来事の時間的な順序関係との時空間的な対応関係を示しており、「時間順序」(temporal sequence) の時空間メタファー (Evans and Green (2006:86)) によって成り立っている (Moore (2014:122))。一方、EARLIER IS BEHIND, LATER IS IN-FRONT は、時間軸上を移動してきた自己の〈背後・後方〉にある時間 (過去) が EARLIER、時間軸上を移動していく自己の〈眼前・前方〉にある時間 (未来) が LATER で示されており、「自己移動」(moving ego) の時空間メタファーによって成り立っている (Moore (2014:122))。

これら 2 つの時空間的な対応関係のパターンは、基本的に、日本語の「まえ」「うしろ」「あと」「さき」においても認められる (澤田 淳 (2025))。たとえば、時間詞「さき」は、(1) では、EARLIER IS IN-FRONT、(2) では、LATER IS IN-FRONT の対応関係を示している。

(1) EARLIER IS IN-FRONT の「さき」

- a. 詳しい事情はさきにお話した通りです。 (参照時 = 発話時)
- b. 大政奉還よりさきに起こった出来事。(参照時 = 発話時以外の時点)

(2) LATER IS IN-FRONT の「さき」

- a. このさきどうなるか心配だ。 (参照時＝発話時)
- b. 失敗のさきに成功が待っている。 (参照時＝発話時以外の時点)

EARLIER IS IN-FRONTの「さき」は、参照時より前の時間を指す。この場合、(1)の例が示すように、参照時が発話時と一致するa文のようなケースと、参照時が発話時以外の時点であるb文のようなケースとがある(b文では、大政奉還がなされた時点が参照時となっている)。一方、LATER IS IN-FRONTの「さき」は、参照時よりあとの時間を指す。この場合も、(2)の例が示すように、参照時が発話時と一致するa文のようなケースと、参照時が発話時以外の時点であるb文のようなケースとがある(b文では、失敗が生じた時点が参照時となっている)。ここでは、a文のような参照時が発話時と一致するケースを「発話時基準」のケース、b文のような参照時が発話時以外の時点であるケースを「非発話時基準」のケースと呼ぶことにする。

本稿では、非発話時基準のEARLIER IS BEHIND, LATER IS IN-FRONTに関する通言語的な議論を概観した上で、非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」(例:「失敗のさきに成功が待っている」)に焦点を当てた考察を行う。

本稿の構成は次の通りである。2節では、非発話時基準のEARLIER IS BEHIND, LATER IS IN-FRONTに関する通言語的議論を概観する。3節では、2節での通言語的議論を踏まえた上で、日本語の非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」について考察を行う。4節では、3節の議論を敷衍し、非発話時基準のEARLIER IS BEHIND, LATER IS IN-FRONTに関する新たな通言語的仮説を提示する。5節でまとめと展望を行う。

2. 非発話時基準のEARLIER IS BEHIND, LATER IS IN-FRONTに関する通言語的議論

Moore (2014: 121-122) は、IN-FRONT、BEHINDとEARLIER、LATERの時空間的な対応関係に関して次の通言語的仮説を提示している。

- (3) 時間の順序を示すIN-FRONT／BEHIND表現の無標符号化の傾向：
 - (a) IN-FRONT表現またはBEHIND表現が、EARLIERまたはLATERの意味を表し、かつ、それらが直示的係留 (deictic anchoring) がなされていない形で用いられている場合、IN-FRONT表現はEARLIERと対応し、BEHIND表現はLATERと対応する。
 - (b) ある言語において、上の (a) の傾向に反する表現が見られる場合、その言語において、EARLIERやLATERを表す別のより一般的かつ無標の表現が存在する。それらのEARLIERやLATERを表す無

標の表現がIN-FRONT表現、BEHIND表現である場合、上の (a) の傾向に合致する。 (Moore (2014 : 121-122))

Moore (2014) のいう「直示的係留がなされている」ケースとは、発話時基準の解釈 (〈参照時 = 発話時〉の解釈) となっているケースのことであり、一方、「直示的係留がなされていない」ケースとは、非発話時基準の解釈 (〈参照時 = 発話時以外の時点〉の解釈) となっているケースのことである。

Moore (2014) の想定のもとでは、下の表に示されるように、EARLIER IS IN-FRONT (front = earlier)、LATER IS BEHIND (behind = later) は、発話時基準の環境 (= 直示的文脈 (deictic context)) でも、非発話時基準の環境 (= 非直示的文脈 (non-deictic context)) でも成立するのに対して、LATER IS IN-FRONT (front = later)、EARLIER IS BEHIND (behind = earlier) は、一般に、発話時基準の環境 (= 直示的文脈 (deictic context)) でのみ成立するとされる。

表 : EARLIER IS IN-FRONT (front = earlier) / LATER IS BEHIND (behind = later) と LATER IS IN-FRONT (front = later) / EARLIER IS BEHIND (behind = earlier) の出現環境の違い (Moore (2014 : 122))

Linguistic expression type	Deictic context	Nondeictic context
front=earlier/behind=later (E.g. <i>she came <u>before</u> we ate</i>)	yes	yes
front=later/behind=earlier (E.g. <i>a bright future <u>before</u> us</i>)	yes	no

すなわち、当該言語のIN-FRONT表現、BEHIND表現が、非発話時基準の環境 (= 非直示的文脈) で用いられた場合、EARLIER IS IN-FRONT (front = earlier)、LATER IS BEHIND (behind = later) の解釈となることを予測するというのが、(3) の仮説 (a) が意味する内容である。

一方、(3) の仮説 (b) は、当該言語のIN-FRONT表現、BEHIND表現が、仮説 (a) に従わない解釈を示す場合 (すなわち、当該言語のIN-FRONT表現、BEHIND表現が非発話時基準の環境 (= 非直示的文脈) で現れているにも関わらず、LATER IS IN-FRONT (front = later)、EARLIER IS BEHIND (behind = earlier) の解釈が成立する場合)、その言語においては、EARLIERやLATERを表す別のより一般的かつ無標の表現が存在し、それらのEARLIERやLATERを表す無標の表現がIN-FRONT表現、BEHIND表現である場合、(3) の (a) の傾向に合致する (すなわち、EARLIER IS IN-FRONT (front = earlier)、

LATER IS BEHIND (behind=later) の対応関係が成立する) ことを予測する仮説である。

Moore (2014 : 123-127) は、仮説 (a) には反するが仮説 (b) に沿う言語として幾つかの言語を挙げている。ここでは、ナイジェリア北部及びニジェールで話されているハウサ語 (アフロ・アジア語族、チャド語派) のデータ (Hill (1978)) を取り上げてみよう。Moore (2014 : 124、193-195) は、Hill (1978) で提示されている次のハウサ語の例を取り上げている。

(4) ranar Talata gaba da ranar Littinin

‘Tuesday is in front of/before Monday’

[ハウサ語] (Hill (1978 : 528))

ここでのハウサ語の例では、「火曜日は月曜日の前 (gaba)」と表現されている。Evans (2003:233) が図 1 に示すように、(4) の例には、「自己移動」のメタファーが反映されている (Moore (2014 : 195) も参照)。

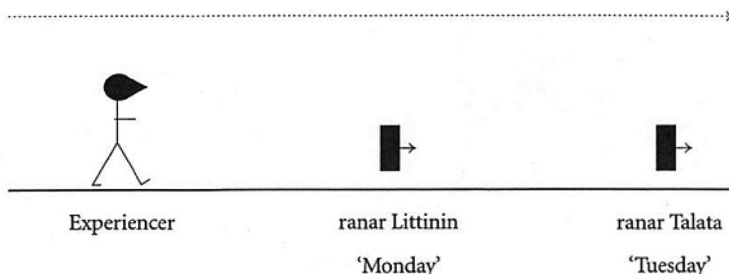


図 1 : 例文 (4) と自己移動のメタファー (Evans (2003 : 233))

Hill (1978) は、(4) の例の gaba (前) の時間用法が LATER IS IN-FRONT の解釈を示すのは、gaba (前) の空間用法が「縦列配列」(tandem alignment) の解釈を示すことと平行性をなす点を指摘している。ここでいう「縦列配列」とは、自己を中心点とする空間座標を平行移動させる形で参照物に投射する空間認識のパターンのことであり、Levinson (2003) のいう「平行型」(translation) の相対的参照枠に相当する。たとえば、スプーンとカラバッシュが自己から見て次の図 2 に示すような位置に置かれていたとしよう (Hill (1982))。

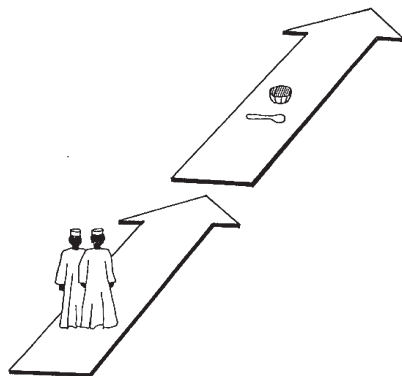


図 2：縦列配列の空間認識 (Hill (1982 : 20-21))

Hill (1982) によれば、ハウサ語で図 2 の状況を gaba (前) を用いて表す場合、通例、「カラバッシュはスプーンの前 (gaba) にある」と表現されるという。

- (5) Ga k'warya can gaba da cokali.
 look calabash there front with spoon
 'There's the calabash in back of the spoon.'

[ハウサ語] (Hill (1982 : 21))

自己から見て参照物 (スプーン) と対象物 (カラバッシュ) とが図 2 のような並びで置かれていた場合、英語や日本語では、「カラバッシュはスプーンの前にある」というよりも、「カラバッシュはスプーンの後ろにある」と表現されるのが一般的である。すなわち、英語や日本語では、下の図 3 に示すような自己を中心点とする空間座標を鏡に反射させるような形で参照物に投射する「鏡像配列」 (= 「反射型」) の空間認識のパターンが採られるのが一般的である (この鏡像配列 (反射型) の空間認識のもとでは、図 3 の状況は、「ボールはラケットの後ろにある／ラケットはボールの前にある」と表現される)。

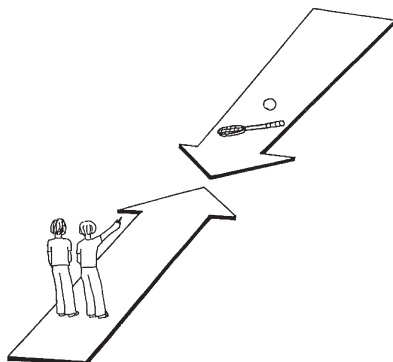


図 3：鏡像配列（反射型）の空間認識（Hill（1982：20-21））

さて、ハウサ語の（4）のIN-FRONT表現gaba（前）は、非発話時基準の環境（＝非直示的文脈）で用いられているが、LATER IS IN-FRONTの対応関係を示している。この点で、仮説（3）の（a）の反例となる。

一方で、ハウサ語では、LATERの意味を表す場合、次のように、BEHIND表現baya（後ろ）を用いることもできるとされる（Hill（1978）、Caron（1998））。

（6）Dauda ya zo bayan Saratu ta fita.

‘Dauda came after Sarah left.’

[ハウサ語]（Hill（1978：530））

Moore（2014：124）は、（4）のようなLATERの意味を表すIN-FRONT表現gaba（前）の用法は、ハウサ語ではそれほど一般的ではないとするCaron（1998：40）の記述を受ける形で、ハウサ語におけるLATERの意味を表す場合のより一般的かつ無標の表現は、（6）のようなBEHIND表現baya（後ろ）であると想定している（Haspelmath（1997：57）も参照）。この想定によれば、ハウサ語におけるLATERを表す無標の表現はBEHIND表現であることになるため、ハウサ語は、仮説（3）の（b）の傾向に沿った言語とみなすことができるとされる（Moore（2014：124））。

さらに、Moore（2014：194）は、（4）のIN-FRONT表現gaba（前）がLATER IS IN-FRONTの解釈を示すことが可能な理由として、そこでの参照時が「時間配列語」（positional term）（Fillmore（1997））で示されている点を挙げている。ここでいう「時間配列語」とは、典型的には、周期的に繰り返される暦内の成員（例：春／夏／秋／冬、月曜日／火曜日／水曜日／…）や、周期的なイベント（例：

クリスマス、お正月、お盆)を示す語類を指す(Moore (2014:186))。Moore (2014:195)は、(4)の例では、「話し手と聞き手は、一週間における曜日の順序を知っており、この点は、話し手と聞き手が図と地の両方を見渡すことのできる空間的状况と相似しているため、平行型の戦略が用いられている」と説明している。

Shinohara and Pardeshi (2011)は、上記のMoore (2014)の論を発展させた議論を行っている。Shinohara and Pardeshi (2011)は、マラーティー語(インド・ヨーロッパ語族、インド・アーリヤ語派)のIN-FRONT表現puDhe(前)／BEHIND表現maage(後ろ)と日本語のIN-FRONT表現「さき」のデータをもとに、非発話時基準のLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈の成立の可否を予測する次の仮説を提示している。

- (7) IN-FRONT／BEHIND表現が順序という時間的な概念を含み、その参照時が時間配列語で言及されている場合、LATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈が引き起こされ得る。

(Shinohara and Pardeshi (2011 : 757))⁽¹⁾

はじめに、次のマラーティー語のデータを見てみよう(Shinohara and Pardeshi (2011))。

- (8) a. GaNapati-wisarjanaa-cyaa-**puDh**-cyaa
 Ganapati-immersion-of-**front**-of
 diwashii bombspoT dzhaalaa
 day bomb blast became
 ‘There was a bomb blast on the day after Ganesh immersion day.’
 b. GaNapati-wisarjanaa-cyaa-**maag**-cyaa
 Ganapati-immersion-of-**back**-of
 diwashii bombspoT dzhaalaa
 day bomb blast became
 ‘There was a bomb blast on the day before Ganesh immersion day.’
 (9) a. *kapaDe dhutalyaa-**puDhe** aaghoL karin
 clothes wash.PstPtcpl-**front** bathing do.Fut
 ‘I will bathe after washing clothes.’
 b. *kapaDe dhuNyaa-**maage** aaghoL karin
 clothes wash.PresPtcpl-**back** bathing do.Fut
 ‘I will bathe before washing clothes.’

Shinohara and Pardeshi (2011 : 755) によれば、母語話者によって容認度の判断にゆれがあるものの、参照時が時間配列語（「ガネーシャ神降誕祭」）で示されている（8）では、IN-FRONT表現puDhe（前）、BEHIND表現 maage（後ろ）が、それぞれ、LATER IS IN-FRONT、EARLIER IS BEHINDの解釈を示すという。一方、参照時が非時間配列語（「洗濯」）で示されている（9）では、IN-FRONT表現puDhe（前）、BEHIND表現 maage（後ろ）において、それぞれ、LATER IS IN-FRONT、EARLIER IS BEHINDの解釈は得られないという（（9）では、時間的順序を示す純粋な時間詞nantar（AFTER）、aadhi（BEFORE）を使って示す必要があるとされる）。

さらに、Shinohara and Pardeshi (2011) は、日本語の非発話時基準のIN-FRONT表現「さき」において、LATER IS IN-FRONTの解釈が得られるか否かに関しても、参照時が時間配列語で示されているか否かが深く関わっている点を指摘している。Shinohara and Pardeshi (2011 : 753) によれば、参照時が時間配列語で示されている場合、「さき」はLATER IS IN-FRONTの解釈を誘引し得るが、参照時が非時間配列語で示されている場合には、「さき」はLATER IS IN-FRONTの解釈を誘引し得ないとされる。たとえば、次の例を見てみよう。

- (10) a. お盆よりさきに、休みをとります。
b. 窓拭きよりさきに、風呂掃除をします。

(Shinohara and Pardeshi (2011 : 752-753))

Shinohara and Pardeshi (2011 : 752-753) は、a文の「さき」は、EARLIER IS IN-FRONTの解釈（休み→お盆の順）のほかに、LATER IS IN-FRONTの解釈（お盆→休みの順）が得られるのに対して、b文の「さき」は、EARLIER IS IN-FRONTの解釈（風呂掃除→窓拭きの順）のみが得られ、LATER IS IN-FRONTの解釈（窓拭き→風呂掃除の順）が得られないという違いがある点を指摘している。そして、この違いは、a文の参照時（「Xよりさき」のX）が時間配列語（「お盆」）で示されているのに対して、b文の参照時が非時間配列語（「窓拭き」）で示されているという違いに起因する点を指摘している⁽²⁾。

では、なぜ、参照時が時間配列語で示されると、「さき」においてLATER IS IN-FRONTの解釈が誘発され得るのであろうか。篠原和子（2008 : 204）は、次の説明を行っている（「主体移動型メタファー」は、「自己移動のメタファー」に相当する）。

- (11) 時間配列語は、言語共同体内で共有された「決まった順序でサイクル状に繰り返される暦上の時間的事象を表す語彙（またはそれに準ずる行事名称）」であるため、その時間的事象の順序列が一連のつながったものとして想起されやすく、それを見渡すという視点を取りやすいと想定される。図4に示すように、時間軸上に固定された順序で並ぶ時間セグメントの列を見渡しつつ、その上を進んでいく自己を想定するという設定が、主体移動型メタファーの構造と合致するのである。

（篠原和子（2008：204））（図の番号調整は筆者）

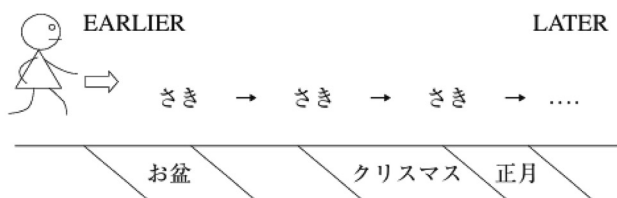


図4：時間配列語と「見渡し」の視点（篠原和子（2008：205））

このような「見渡し」の視点（ないしは、眺望的視点）が取りやすくなると、「さき」においてLATER IS IN-FRONTの解釈が得られやすくなるとする篠原和子（2008）の指摘は重要であり、本稿でも支持したい。ただし、本稿では、少なくとも日本語の「さき」に関しては、参照時が時間配列語で示されていない場合でも（すなわち、非時間配列語で示されている場合でも）、「見渡し」の視点を採ることができ、LATER IS IN-FRONTの解釈が自然に成立すると考える。次節では、この点を実例から示すとともに、「時間配列語か否か」とは別の観点から、非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の成立条件を探る。

3. 非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」

3.1. 非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の用例

次の「非時間配列語＋よりさき」の例の「さき」は、LATER IS IN-FRONTの解釈を示しており、Shinohara and Pardeshi（2011）による（7）の仮説の予測からは外れる解釈となっている⁽³⁾。

- (12) 「自分が見る限りでは良くなっていると思う。ジュリアードの学生はいつも最後にした演奏より先の事を考えている。求めるところはこまめで、と言う事が無いという態度で勉強している生徒が多く、これから

も良くなると信じている。(略)」

[LATER IS IN-FRONTの「さき」]
(『讀賣新聞』1994年06月28日、夕刊)

さらに、「X+よりさき」「X+からさき」以外のパターンにまでデータを広げるならば、以下の例のように、参照時が非時間配列語で示されている場合でも、「さき」がLATER IS IN-FRONTの解釈を示す例が広範囲かつ一般的に確認される。

- (13) 「(中略) 相当数の合格者は受験勉強の先に何も見えていないのではないか。ペーパーテスト以外の方法で見極める必要がある」。

[LATER IS IN-FRONTの「さき」]
(『朝日新聞』2016年03月06日、朝刊)

- (14) 東京で再び新型コロナウイルスの感染が広がり、都内のホテルで宿泊療養する軽症者も増えている。ホテルでは、東京五輪・パラリンピックを準備してきた職員たちも対応にあたっている。「困難の先に五輪がある」。そんな思いを胸に、本来の業務を離れてコロナ対策に力を入れている。

[LATER IS IN-FRONTの「さき」]
(『朝日新聞』2020年07月15日、夕刊)

- (15) 昔、洋行した文人は帰国後、その成果を創作や翻訳を通じて日本語文化に還元した。そうした文化交信の先に大江健三郎、中上健次、村上春樹などの小説家も生まれ、またその作品が海外でも読まれるという循環を形成したが、今後は国外に出て他国語で書く作家も増えていくかもしれない。

[LATER IS IN-FRONTの「さき」]
(『朝日新聞』2023年01月25日、朝刊)

- (16) 戦前、米国への敵意をあおって世論を喚起させた反省を、政治やメディアは敗戦を経て胸に刻んだはずだ。敵意の醸成と熱狂の先にあるのは破滅だということを改めて思い起こし、すべての当事者に自制を求めたい。

[LATER IS IN-FRONTの「さき」]
(『朝日新聞』2025年11月24日、朝刊)

- (17) 世界中でニューロテックと呼ばれる脳科学を応用した技術の開発が盛んだ。脳に電極を埋め込み、信号を取り出して機械を操作するといった研究の先には、考えている内容をそのまま相手の脳に送る脳情報通信も実現するかもしれない。

言語によっては非発話時基準のLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈の成立の可否に参照時が時間配列語で示されているか否かが関わっている可能性はあるが、上記のデータは、少なくとも日本語の「さき」においては、参照時が時間配列語で示されていることがLATER IS IN-FRONTの解釈を成立させるための条件とはいえないことを示唆している。

3.2. 非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の成立条件

本稿では、非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の成立条件として、新たに次の条件を提示してみたい。

(18) 非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の成立条件：

非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」では、前件の事柄を参照点として、そこから時間的に隔たった後件の事柄を見渡す話し手の（未来指向的な）眺望的視点を読み取ることができなければならない。

前節で紹介したように、篠原和子（2008:204）は、眺望的視点（見渡しの視点）が取りやすくなると、「さき」において、LATER IS IN-FRONTの解釈が得られやすくなるという重要な指摘を行っている。本稿では、この指摘を踏まえ、非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」には、前件の事柄を参照点として、そこから時間的に隔たった後件の事柄を見渡す話し手の（未来指向的な）眺望的視点（＝（未来を）望み見る視点）を読み取ることができなければならないという意味的条件が課されるものと考ええる。先に見た（13） - （17）の例の「さき」は、いずれもこの意味的条件を満たしていると解釈される。

（18）の条件によれば、Shinohara and Pardeshi（2011：753）が挙げた（10）の例の解釈の違いは、以下のように説明される。すなわち、（10a）の2つの事柄（お盆と休み）の間には、前件の事柄（お盆）を参照点として、そこから時間的に隔たった後件の事柄（休み）を見渡す話し手の未来指向的な眺望的視点（＝未来を望み見る視点）が自然に読み取れるのに対して、（10b）の2つの事柄（窓拭きと風呂掃除）の間には、前件の事柄（窓拭き）を参照点として、そこから時間的に隔たった後件の事柄（風呂掃除）を見渡す話し手の未来指向的な眺望的視点（未来を望み見る視点）を読み取るのは困難である。それゆえ、（10a）の「さき」と異なり、（10b）の「さき」は、LATER IS IN-FRONTの解釈が得られないと説明される。

さらに、(18) の条件をもとに、次の例を考えてみよう。

(19) (みどりの日：5月4日、子どもの日：5月5日)

a. 「みどりの日」のあとに「こどもの日」がある。

(LATER IS BEHINDの「あと」)

b. ??「みどりの日」のさきに「こどもの日」がある。

(LATER IS IN-FRONTの「さき」)

「みどりの日」の次の日が「子どもの日」であり、前件の事柄に後件の事柄が後続することを示すLATER IS BEHINDの「あと」の使用は自然である。一方、ここでは、LATER IS IN-FRONTの「さき」の使用は不自然である。LATER IS IN-FRONTの「さき」は、前件の事柄を参照点として、そこから時間的に隔たった後件の事柄を見渡す話し手の（未来指向的な）眺望的視点を読み取ることができなければならないが、連続（隣接）する日にちに対して、そのような眺望的視点を読み込むことは困難である。

では、なぜ、非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」には、(18) の意味的条件が課されるのであろうか。結論からいえば、それは、源泉領域である空間用法の「さき」の意味的特徴を引き継いでいるためであると考えられる。非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の源泉領域となる空間用法の「さき」は、次のように、移動する人、または、移動をナビゲートする人（自己）の前方にある参照地よりさらに向こう（遠く）の地点（対象地）を指す。

(20) (道案内をする場面)

コンビニなら、あの交差点のさきにあります。

空間用法の「さき」においては、参照地と対象地とが空間的に隔たっており（隣接しておらず）、対象地を見渡す自己の眺望的視点が認められる（国広哲弥（1997：255）、篠原和子（2008：191）、澤田淳（2022：261-262、2025：13）も参照）。たとえば、(20) で示されるコンビニがある地点とは、交差点に隣接した地点ではなく、交差点から隔たった距離にある地点である。この参照地から空間的に隔たった対象地を見渡す自己の眺望的視点を反映する空間用法の「さき」に見られる意味的特徴が、目標領域である非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの時間用法の「さき」に引き継がれているのである。

4. 非発話時基準のLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈に関する通言語的仮説

前節で見たように、「あの交差点のさきにコンビニがある」といった場合、「自己-交差点-コンビニ」の並びとなり、自己から見て交差点の向こうにコンビニがあることになる。この点で、空間用法の「さき」は、「縦列配列」（「平行型」）のパターンを示す（篠原和子（2008）、真栄城玄太（2012）、澤田淳（2022、2025）など）。一方、空間用法の「まえ」は、通例、「縦列配列」（「平行型」）ではなく、「鏡像配列」（「反射型」）のパターンを示す（篠原和子（2008）、真栄城玄太（2012）、澤田淳（2022）など）。たとえば、「木のまえに自転車が置いてある」といった場合、「自己-自転車-木」の並びとなり、自己から見て木の手前に自転車があることになる。

時間用法の「さき」と異なり、時間用法の「まえ」は、非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの解釈を持ち得ない。

(21) (失敗→成功の順で。LATER IS IN-FRONTの解釈)

- a. 失敗のさきに成功が待っている。
- b. ??失敗のまえに成功が待っている。

この違いは、一般に、空間用法の「さき」と異なり、空間用法の「まえ」が「縦列配列」（「平行型」）の解釈を示さないという点と深い関係があるといえる。Hill（1978）も、ハウサ語のgaba（前）／baya（後ろ）の時間用法がLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈を示し得るのは、gaba（前）とbaya（後ろ）の空間用法が「縦列配列」（「平行型」）の解釈を示し得る点と平行性をなす点を指摘している。

以上の議論を踏まえて、当該言語の非発話時基準のIN-FRONT表現／BEHIND表現がLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈を持つための条件として、次の通言語的仮説を提出してみたい。

(22) 非発話時基準のLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈に関する通言語的仮説：

当該言語において、IN-FRONT／BEHIND表現が空間用法において縦列配列（平行型）の解釈を持ち得る場合、そのIN-FRONT／BEHIND表現は、時間用法においてLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈を持ち得る。

この仮説によれば、時間用法の「さき」が非発話時基準の解釈において LATER IS IN-FRONTの解釈を示せるのは、空間用法の「さき」が「縦列配列」(「平行型」)の解釈を示せるためであると説明される。また、ハウサ語の gaba (前) / baya (後ろ) の時間用法が LATER IS IN-FRONT / EARLIER IS BEHIND の解釈を示し得るのは、gaba (前) と baya (後ろ) の空間用法が「縦列配列」(「平行型」)の解釈を示し得るためであると説明される。

Levinson and Majid (2013) によれば、パプアニューギニアのロッセル島で話されているイエリ・ダニエ語 (Yéli Dnye) (孤立言語) では、空間領域において「縦列配列」(「平行型」)と「鏡像配列」(「反射型」)の双方の解釈が認められるが、同様のことが時間領域においても認められるとされる。たとえば、次の例を見てみよう。

- (23) a. Tuesday u kuwó Wednesday
 Tuesday it's behind Wednesday
 'Tuesday (is) behind Wednesday, i.e., precedes'
 b. Tuesday u kada Wednesday
 Tuesday its front side Wednesday
 'Tuesday (is) before Wednesday'
 [イエリ・ダニエ語] (Levinson and Majid (2013: 4))

Levinson and Majid (2013: 4) によれば、イエリ・ダニエ語では、火曜日と水曜日の時間的順序関係を示す場合、a文のように、「火曜日は水曜日の後ろ (kuwó)」 (= EARLIER IS BEHIND) と表現できるし、b文のように、「火曜日は水曜日の前 (kada)」 (= EARLIER IS IN-FRONT) と表現できるという。上のa文のように、イエリ・ダニエ語の BEHIND 表現 (kuwó) が、時間用法において EARLIER IS BEHIND の解釈を持ち得るのは、それが空間用法において「縦列配列」(「平行型」)の解釈を持ち得るためであると考えられる。

5. おわりに

本稿では、時間用法の「さき」のうち、非発話時基準の LATER IS IN-FRONT の「さき」(例:「失敗のさきに成功が待っている」)がいかなる条件のもとで成立するのかに関して、空間用法の「さき」との関連から考察を行った。さらに、非発話時基準の LATER IS IN-FRONT の「さき」の議論を敷衍し、IN-FRONT / BEHIND 表現が LATER IS IN-FRONT / EARLIER IS BEHIND の解釈を持つための条件を通言語的仮説として提示した。本稿で得られた主な知見を以下に示す。

1. 非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」では、前件の事柄を参照点として、そこから時間的に隔たった後件の事柄を見渡す話し手の（未来指向的な）眺望的視点を読み取ることができなければならない。
2. 1が示す非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の意味的特徴は、参照地から空間的に隔たった対象地を見渡す自己の眺望的視点を反映する空間用法の「さき」に見られる意味的特徴を、「自己移動」の時空間メタファー（時空間マッピング）を通して引き継いだものである。
3. 当該言語において、IN-FRONT／BEHIND表現が空間用法において縦列配列（平行型）の解釈を持ち得る場合、そのIN-FRONT／BEHIND表現は、時間用法においてLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈を持ち得る（＝「非発話時基準のLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈に関する通言語的仮説」）。

本稿で提案した「非発話時基準のLATER IS IN-FRONT／EARLIER IS BEHINDの解釈に関する通言語的仮説」がどの程度の一般性を持ち得るのかについては、今後様々な言語をもとに検証していく必要がある。

注

- (1) Shinohara and Pardeshi (2011 : 751) では、周期的に繰り返される暦内の成員（例：春／夏／秋／冬、月曜日／火曜日／水曜日／…）や、周期的なイベント（例：クリスマス、お正月、お盆）を示す語類（Moore (2014 : 186)）に加えて、さらに、ビジネス取引のシナリオ内の一連の事柄を示す語（例：発注日／支払日／発送日）や、病院シナリオ内の一連の事柄を示す語（例：入院日／手術日／退院日）も、決まった順序で展開する事柄を示す語であるため、時間配列語に含められている。
- (2) 篠原和子（2008）は、これらの例をもとに、次のように述べている。

(i) このように、細かくみていくと「時間配列語＋からさき／よりさき」ではLATER IS FRONTの解釈が可能であるのに、同種の構文で非時間配列語を用いると、この解釈ができなくなる場合があることがわかる。時間配列語は非時間配列語よりもLATER IS FRONTの概念対応に関して安定していると言えそうである。本稿ではこの点に注目し、日本語の「さき」は時間配列語との組み合わせによって、より安定したかたちでLATER IS FRONTの概念対応を示すと考える。
(篠原和子（2008 : 203）)

篠原和子（2008）では、「非時間配列語＋よりさき／からさき」において、LATER IS IN-FRONTの解釈の可能性が必ずしも排除されていないようである。実際、篠原和子（2008）では、次のような「非時間配列語＋よりさき／からさき」の例が挙げられている。

(ii) a. 家族旅行は、叔母の手術より先のことになるだろう。

b. 東京に引っ越してから先、ずっと墓参りをしていない。

[LATER IS IN-FRONTの「さき」]

(篠原和子 (2008 : 197))

Shinohara and Pardeshi (2011) では、参照時が非時間配列語で示されている場合には「さき」はLATER IS IN-FRONTの解釈を誘引し得ないとされていることから、非発話時基準のLATER IS IN-FRONTの「さき」の解釈の成立条件が、篠原和子 (2008) よりもより厳しい形で捉えられていることになる。

(3) 渡辺実 (1995 : 22-23) が挙げる次の例の「さき」も、LATER IS IN-FRONTの解釈を示す。

(i) 応仁の乱のさきに戦国時代が待っていることを予言した者はいなかった。

(渡辺実 (1995 : 22-23))

「応仁の乱」は、周期的に繰り返される暦内の成員ではないため、時間配列語とはいえない。

また、碓井智子 (2020 : 268-267) では、次の例が挙げられている。

(ii) 出産が予定日より先になった。

(碓井智子 (2020 : 268))

碓井智子 (2020:268-267) は、この例では、参照時が時間配列語ではないが、「さき」がEARLIER IS IN-FRONTの解釈のみならず、LATER IS IN-FRONTの解釈も可能である点を指摘している。ただし、Shinohara and Pardeshi (2011 : 751) では、時間配列語の範囲を拡張し、病院シナリオ内の一連の事柄を示す語 (例：入院日／手術日／退院日) なども時間配列語に含められていることから (注1 参照)、(ii) の例の参照時の「予定日」も、出産シナリオ内の一連の事柄 (例：妊娠日、出産予定日、出産日) を示す時間配列語とみなされる可能性もある。

参考文献

- Caron, Bernard (1998) From body to space and time : Hausa *gaba* and *baya*. In : Petr Zima and Vladimir Tax (eds.) *Language and Location in Space and Time*. 36-44. München : Lincom Europa.
- Evans, Vyvyan (2003) *The Structure of Time*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- Evans, Vyvyan and Melanie Green (2006) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh : Edinburgh University Press.
- Fillmore, Charles. J. (1997) *Lectures on Deixis*. Stanford : CSLI Publications. (Fillmore, Charles. J. (著)・澤田淳 (訳) (2022) 『ダイクシス講義』東京：開拓社.)
- Haspelmath, Martin (1997) *From Space to Time: Temporal Adverbials in the World's Languages*. München : Lincom Europa.

- Hill, Clifford Alden (1978) Linguistic representation of spatial and temporal orientation. *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*. 524-538.
- Hill, Clifford Alden (1982) UP/DOWN, FRONT/BACK, LEFT/RIGHT : A Contrastive Study of Hausa and English. In : Jürgen Weissenborn and Wolfgang Klein (eds.) *Here and There: Cross-linguistic Studies on Deixis and Demonstration*. 13-42. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- 国広哲弥 (1997) 『理想の国語辞典』 東京 : 大修館書店.
- Levinson, Stephen C. (2003) *Space in Language and Cognition: Exploration in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C. and Asifa Majid (2013) The island of time : Yéli Dnye, the language of Rossel Island. *Frontiers in Psychology* 4 : 1-11.
- 真栄城玄太 (2012) 「「さき」の空間的意味についての考察」『KLS』 32 : 243-255. 関西言語学会.
- Moore, Kevin Ezra (2014) *The Spatial Language of Time*. Amsterdam : John Benjamins Publishing Company.
- 澤田淳 (2022) 「[訳者解説] ダイクシス研究の新展開」 Fillmore, Charles. J. (著)・澤田淳 (訳) 『ダイクシス講義』 221-297. 東京 : 開拓社.
- 澤田淳 (2025) 「「まえ」「さき」「うしろ」「あと」の時間用法と時空間メタファー」『青山学院大学文学部紀要』 66 : 127-152.
- 篠原和子 (2008) 「時間メタファーにおける「さき」の用法と直示的時間解釈」篠原和子・片岡邦好 (編) 『ことば・空間・身体』 179-211. 東京 : ひつじ書房.
- Shinohara, Kazuko and Prashant Pardeshi (2011) The more in front, the later : The role of positional terms in time metaphors. *Journal of Pragmatics* 43 (3) : 749-758.
- 碓井智子 (2020) 「空間と時間のメタファー」 池上嘉彦・山梨正明 (編) 『講座 言語研究の革新と継承 5 認知言語学Ⅱ』 253-272. ひつじ書房.
- 渡辺実 (1995) 「所と時の指定に関わる語の幾つか—意味論的に—」『国語学』 181 : 18-29.

(さわだ じゅん／本学教授)